

●病害虫の発生に注意

○いもち病の発生が心配されます

高温多湿な天候はいもち病の発生が心配されます。葉いもち予防剤の使用を基本としますが、葉いもちの発生を確認したら直ちにブラシン剤またはノンプラス剤を散布し、お近くの営農センターへご連絡をお願いいたします。

また、穂いもち対策としてコラトップ剤を散布します。

※余り苗を放置するといもち病の伝染源となるので、直ちに土の中に埋めるなどして確実に処分してください。

○いもち病防除剤

農薬名	倍率	散布量(10a)	使用時期	使用回数	使用方法
ブラシン粉剤DL	-	3~4kg	収穫7日前まで	2回以内	散布 ※散粉機の開度を一目盛程度で散布
ノンプラス粉剤DL					
ブラシフロアブル	1,000倍	100~150ℓ			均一に散布する。
ノンプラスフロアブル					
コラトップ粒剤5	-	3~4kg	葉いもちに対しては初発10日前~初発時、穂いもちに対しては出穂30日前~5日前まで	水深最低3cm以上で散布無人ヘリでの散布可能 水深3~5cmの湛水状態で均一に散布する。	
コラトップ豆つぶ	-	250~375g			

○紋枯れ病にも注意が必要です

ここ数年、紋枯れ病の発生が目立つようになってきています。昨年発病したほ場や穂ばらみ期~出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前~穂揃期に茎葉散布剤で防除します。その際、薬剤が株元に到達するように散布します。

○紋枯れ病対策

農薬名	倍率	散布量(10a)	使用時期	使用回数	使用方法
モンカットファイン粉剤20DL	-	3~4kg	収穫14日前まで	3回以内	散布 ※散粉機の開度を一目盛程度で散布
モンカットフロアブル	1,500倍	60~150ℓ	収穫14日前まで	3回以内	均一に散布する。
モンガリット粒剤	-	4kg	収穫45日前まで	2回以内	水深3~5cmの湛水状態で均一に散布する。

○斑点米カメムシ類被害はほ場内の雑草防除と畦畔の除草で防ぎます。

ノビエヤホタルイは斑点米カメムシ類を誘き寄せます。主な繁殖地となる農道・畦畔・休耕田などの除草を地域でまとまって行います。徹底した雑草管理で住処となる雑草のないきれいなほ場を目指しましょう。

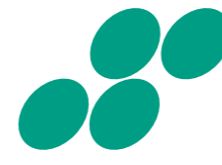
今年のおばこ草刈り一斉デーは7月16日~21日です。 ※出穂の10~15日前
参考：本田除草と水田周辺の草刈り時期

	7/16~7/21 一斉草刈りデー				
	6月 上~下旬	7月 上旬	中旬	下旬	8月 上旬
農道 畦畔	← 草刈り →	← 草刈り →	← 草刈り →	← 草刈り →	← 草刈り禁止 →
法面休耕田等	← 草刈り →	← 草刈り →	← 草刈り →	← 草刈り →	← 草刈り禁止 →

○畦畔除草剤

薬剤名	薬液量(10aあたり)	希釈水量(10aあたり)	使用時期	使用回数	備考
バスタ液剤	500~1000ml	100~150ℓ	収穫7日前まで	2回以内	バスタ、ザクサと合計2回まで
ザクサ液剤	500~1000ml	100~150ℓ	収穫7日前まで	2回以内	
ラウンドアップマックスロード	200~500ml	50~100ℓ	収穫前日まで	3回以内	一年生雑草
	200~1000ml				多年生雑草
グラスショット液剤	300~500ml	50~100ℓ	収穫前日まで	3回以内	イボクサにも効果あり

※いずれの剤も稲にかかると薬害を生じますので散布の際は飛散防止カバー等を使用し、風向きに注意して散布しましょう。



安心のネットワーク
NOSAI

No.4

農業技術情報

令和元年6月発行

発行：秋田おばこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



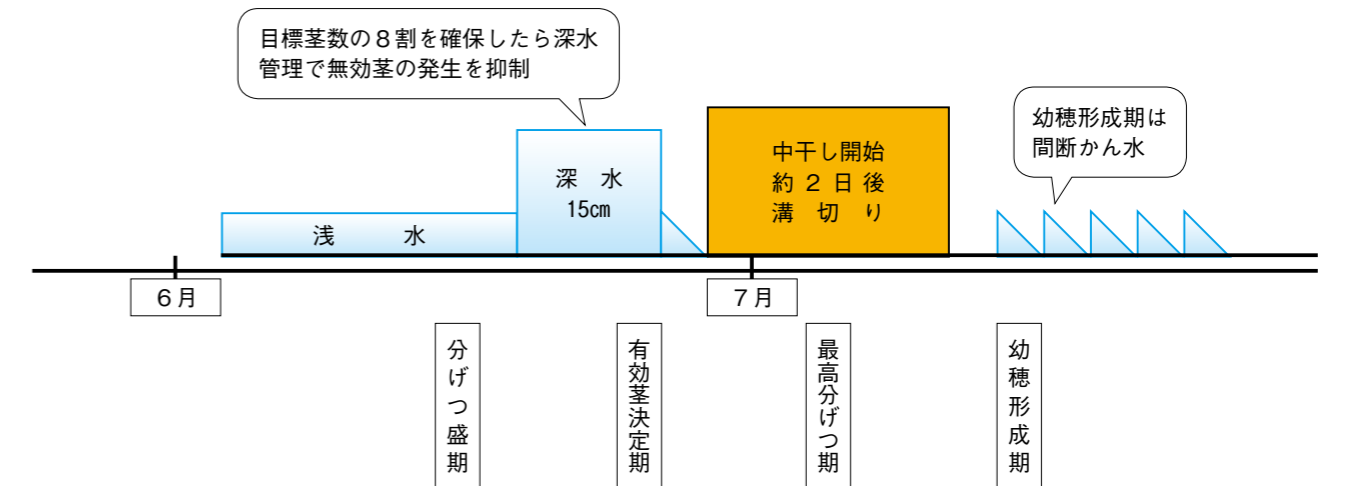
気象変動に対応した適切な水管理が良食味安定生産に直結!!

田植始期以降は天候の良い日が続き、苗の活着もよく順調に生育しています。しかし、春に生ワラをすき込んだほ場では、高温により土壌の還元状態が進み、分けつの不足が心配されます。水管理で還元(ワキ)を抑え、根の健全化に努めましょう。

○例年よりも晴れの日が少ない予報

気象庁から発表された長期予報によると今年の夏は平年に比べ気温が低く降水量は平年並み~多い確率が高いと予報されています。

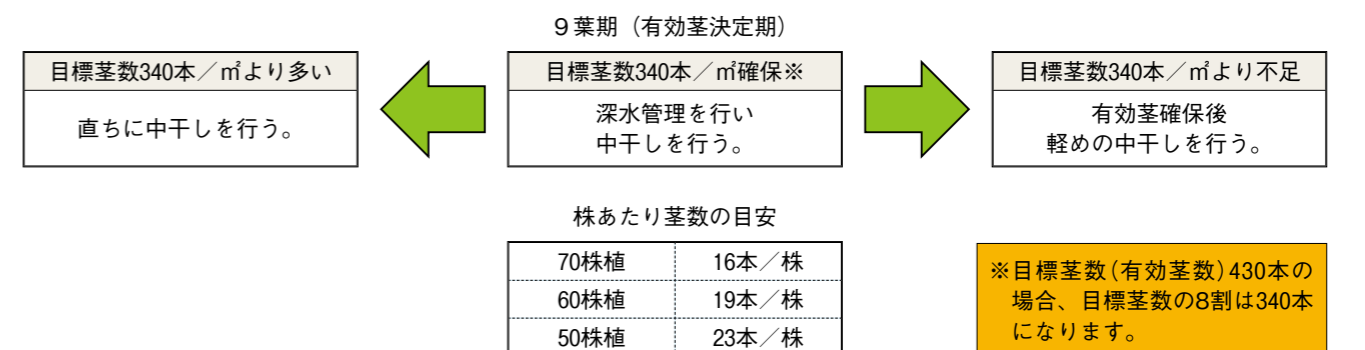
○深水管理で太莖化→有効茎歩合向上→1株内の穂揃い良化→収量・品質の安定



6月は浅水管理を基本とし、水温と地温を高め日気温格差を大きくして、第3~6節の1次分けつの発生を促し、早期に有効莖を確保するように努めます。かん水は夜間から早朝にかけての地温が低い時間帯に短時間でいき、水口付近の青立ち(生育遅延)を防ぎます。

- ・用水が冷たい場合は、ポリチューブを用いて積極的に水温の上昇に努めます。
- ・浅水管理期間中の低温や強風時には5~6cmの湛水状態にします。
- ・有効莖決定期(6月下旬)に、目標莖数(下記図)の8割を確保したら、深水管理・中干し(7~10日間)を実施します。

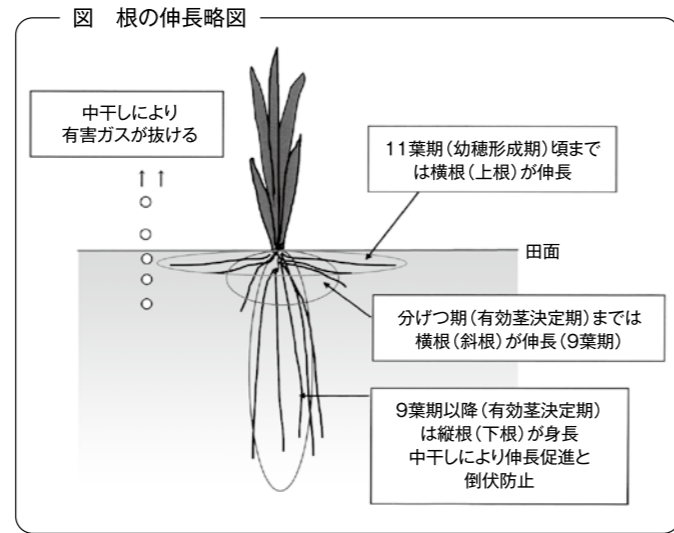
(例) 目標莖数430本/m²の場合



●中干しと溝切の実施

○中干しの効果と方法

- ① 目標茎数の8割を確保後、深水と落水により無効分げつを抑え、葉を立て受光体勢を改善し、下位節間の伸長を抑え、倒伏しにくい稲に仕上げます。
- ② 土壌中に酸素を供給し、還元状態で生成される有害物質（硫化水素、有機酸）を放出して、下根（縦根）の伸長を促進し、後半まで活力を維持させます。
- ③ しっかり干すことで、収穫間近の落水でも容易に田面が硬くなり、刈り取り作業がスムーズに行えます。
- ④ 中干しの実施期間は7～10日程度とし、幼穂形成期前には終了します。中干しの程度は田面に1～2cm程度の亀裂が入り足跡が着く程度とします。田面が白くなる過度な中干しは、根を痛め稲体の衰弱に繋がるなどの悪影響を及ぼすため注意が必要です。（特に黒ボク土・泥炭）
- ⑤ 中干し終了後は間断かん水とし、土壌を酸化的な状態に保ち根の活力を維持します。



○溝切を実施しましょう。（ほ場整備初年度は必須!!）

溝切を行うと、用水の不足する時期でも効率的にかん水を行うことが可能になります。また排水を素早く行うことができ、登熟後半まで水を張ることができます。そのため、登熟歩合の向上にも繋がります。

溝切は中干し開始2～3日後の田面がやや軟らかい状態で行います。溝切機が歩行型の場合はこの状態で行い、乗用型は少し水を張った状態で行うと作業効率が上がります。また溝の交差している部分と水尻は必ず繋がります。**排水不良田や田面に高低差があるほ場では溝切は必ず行います。**

○水田にノビエ・ホタルイが残ってしまった場合中後期除草剤で徹底防除

今年の雑草の生育は早く、斑点米カメムシ類の発生時期も平年より早く、発生量は、平年並み～やや多いと予想されています。雑草が残草してしまったほ場では中後期剤を使用し、雑草防除を徹底して行います。

剤系	薬 剤 名	使 用 量 希 釈 水 量	本 剤 使用回数	使 用 時 期 方 法
ヒ エ 剤	クリンチャー1 ^{キロ} 粒剤	1kg/10a	2回以内	移植後7日～ノビエ4葉期 但し、収穫30日前まで 湛水散布、又は無人ヘリコプターによる散布
		1.5kg/10a		移植後25日～ノビエ5葉期 但し、収穫30日前まで 湛水散布、又は無人ヘリコプターによる散布
	クリンチャーEW	100ml/10a 25～100ℓ	2回以内	移植後20日～ノビエ6葉期 但し、収穫30日前まで 落水散布
	ヒエクリーン1キロ粒剤	1kg/10a	1回	移植後15日～ノビエ4葉期 但し、収穫45日前まで 湛水散布、又は無人ヘリコプターによる散布
広 葉 剤	バサグラン粒剤	3～4kg/10a	1回	移植後15日～55日 但し、収穫60日前まで 落水散布又はごく浅く湛水し散布※スポット処理可能
	バサグラン液剤	500～700ml/10a 70～100ℓ	2回以内	移植後15日～55日 但し、収穫50日前まで 落水散布又はごく浅く湛水し散布※スポット処理可能 注・異常高温下での散布は避ける
ヒ エ ・ 広 葉 雑 草	クリンチャーバスマE液剤	1000ml/10a 70～100ℓ	2回以内	移植後15日～ノビエ5葉期 但し、収穫50日前まで 落水散布又は浅水状態で散布※スポット処理可能
	ヒエクリーンバサグラン粒剤	3kg/10a	1回	移植後15日～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで ごく浅く湛水し散布 注・異常高温下での散布は避ける
	アトトリ豆つぶ250	250g/10a	1回	移植後20日（イネ5葉期以降）～ノビエ4葉期 但し、収穫45日前まで、湛水散布、 又は無人ヘリコプターによる散布
	レブラス1キロ粒剤	1kg/10a	1回	移植後15日（イネ4葉期以降）～ノビエ5葉期 但し、収穫60日前まで、湛水散布、 又は無人ヘリコプターによる散布※効果は遅効的
	ワイドアタックSC	100ml/10a 100ℓ	2回以内	移植後25～40日（イネ5葉期以降）～ノビエ5葉期 但し、収穫30日前まで 落水散布又はごく浅く湛水し散布 ※効果は遅効的

○ケイ酸質肥料を施用しましょう（散布適期 6月下旬～7月中旬）

ケイ酸を施することにより稲体が丈夫になり葉が直立し、受光体勢が良くなり、効率的に光合成が行われます。

高温時にも稲体の呼吸を促すことにより葉温の上昇を防ぎ、養分が効率的に籾に送られ、白未熟粒の発生を防ぎます。また、ケイ酸を十分に吸収することにより、籾殻の結合を強くし割れ籾の発生を抑え、カメムシ類による斑点米の被害を低下させます。土づくり肥料として、春に散布していない方は必ず施用します。

○中間追肥

肥 料 名	種 類	施肥量(kg/10a)	施用時期	施 用 効 果
おばこロマン大地	ケ イ 酸 資 材	20～40kg	6月下旬～ 幼穂形成期 まで	①倒伏抵抗性が高まる ②根の活力向上 ③有効茎歩合の向上 ④登熟歩合の向上 ⑤食味の向上 ⑥病害虫被害の軽減 ⑦葉身の老化軽減 ⑧ワキの発生を抑制
ケイ酸加里		20kg		
K S K 28		1.4kg (1本)		
P K 40号※	リ ン 酸 資 材	20kg		
マグコープ※				

※異常還元（ワキ）等により、分げつの遅れている稲や根張りの弱い稲に使用

○生育状況を把握し、適切な穂肥を施用します

不安定な天候の中でも、順調に登熟させるには、生育状況を把握し適切な穂肥を行うことが大切です。幼穂形成期（7月15日頃）に生育・栄養診断を行い、生育状況や気象予報に応じた穂肥の判断をしましょう。

○時期別理想生育量（あきたこまち）

項 目	時 期	最高分げつ期	幼穂形成期	減数分裂期
		7月5日	7月15日	7月25日
草 丈 (cm)	上 限	50	64	75
	理 想	47	62	74
	下 限	45	60	72
茎 数 (本/m ²)	上 限	484	484	454
	理 想	462	463	437
	下 限	440	443	420
葉 数	上 限	10.0	11	12.5
	理 想	9.8	10.9	12.3
	下 限	9.6	10.7	12.1
葉 色 (SPAD値)	上 限	45	43	39
	理 想	44	42	38
	下 限	43	41	37

○幼穂形成期（出穂25日前後）の草丈（cm）×茎数（本/m²）と幼穂伸長期間の診断

幼穂形成期の生育量	幼穂伸長期間の気象予報別の追肥対応		
	低温・少照・多雨	平年並	高温・多照・少雨
27,000未満	幼形期・減分期 窒素2kgづつ2回	幼形期・減分期 窒素2kgづつ2回	幼形期・減分期 窒素2kgづつ2回
27,000以上 30,000未満	幼形期…ムラ直し 減分期…窒素1.5kg	幼形期・減分期 2回で合計3kg以内	幼形期・減分期 2回で合計3kg以内
30,000以上 34,000未満	幼形期…なし 減分期…ムラ直し	幼形期…ムラ直し 減分期…窒素1.5kg	幼形期…ムラ直し 減分期…窒素1.5kg
34,000以上	なし	なし	なし

※上記の表は目安のため、詳しくは各営農センターへご相談ください

○追肥専用肥料

肥 料 名	施用量(kg/10a)	施 用 時 期	備 考
おばこロマンみのり	7～13kg	出穂前15日	硫安系 15-4-15 有機20%入り
おばこロマンめぐみ			塩安系 15-4-15 有機20%入り